

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ことばの系統や言語変化の理解にむけた新しい方法論の可能性：共同研究：
言語の系統関係を探る—その方法論と歴史的研究における意味 (2010-2012)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊澤, 律子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5147

ことばの系統や言語変化の理解にむけた 新しい方法論の可能性

文・写真
菊澤律子

共同研究 ● 言語の系統関係を探る — その方法論と歴史的研究における意味 (2010-2012)

第20回国際歴史言語学会

2011年7月25日から30日、共同研究のメンバーに専門委員を務めていただき、国立民族学博物館で第20回国際歴史言語学会を開催した。参加総数は319名(うち、海外からの参加者は239名)、公開で行ったワークショップおよびシンポジウムの一般参加者は、合計224名となった。

歴史(比較)言語学の分野は、親縁関係にある(可能性がある)言語を扱うことが前提となっていることから、必然的に研究におけるアプローチや研究成果の発表も、各語族内で行うことが多くなる。前回までのこの学会では、インド・ヨーロッパ系の言語の専門家の出席および発表の比率が極めて高かった。今回は、アジア圏での初めての開催ということもあり、本共同研究の趣旨でもある「異なる語族を専門とする研究者間の往き来の促進」を意識して、いくつかの工夫をした。たとえば、全体講演は、専門委員から寄せられた候補者の中から研究対象となる語族の多様性を考慮し、インド・ヨーロッパ語族に加え、中南米の言語、オーストロネシア諸語、日本の言語、手話言語、社会歴史言語学の専門家に講演を依頼した。その結果、これら各地域や分野の言語に関する研究発表の応募が多くなり、加えてアフリカの言語に関するワークショップや多数のシナ系言語の発表も採択され、全体的に研究発表の内容の幅が広がった。また、分科会の公募では通語族的なテーマを奨励したが、その結果、合計20のうち15が理論や研究手法、言語現象に焦点を当てた分科会となり、それぞれで多様な言語に関する報告がみられた。「語族間の対話の推進」への考慮は参加者にも明確に認識され、よい評価を得ることができた。

一方で、伝統的な歴史言語学と、言語学における言語変化に関する新しいアプローチとの対話、コンピューターによる

統計処理等を積極的に取り入れた解析方法の発達、手話言語研究の躍進など、様々な面で次代の方法論に結びつく内容も多かった。本共同研究のテーマは、方法論とその将来への発展の可能性であるが、この学会でも、共同研究発足の動機ともなった比較方法と言語類型論の融合、コンピューター解析の歴史言語学への応用等、「古くて新しい」問題に加え、これまでは視野に入っていなかつ



第20回歴史言語学会発表要旨集の表紙。



筆のタッチを生かした学会ロゴは、アジア初開催を考慮したものの。豊能障害者労働センターによるデザイン。

た手話の歴史言語学的研究といった最新の研究動向が報告され、共同研究を推進する上で重要な議論の展開をみた。

新しいアプローチ① 比較方法と類型論

歴史言語学は、言語の親縁関係を調べ、系統関係が認められる言語における言語変化の過程を解明する分野である。理論的には、音韻体系、統語論(いわゆる「文法」)や語彙など、言語を構成するどのような要素でも分析の対象となる。手法としてもっとも長い歴史をもつのは、この中の語彙を対象とする比較方法(Comparative Method)である。比較方法では、複数の言語間にみられる規則的な音対応を洗い出し、それに基づいて同源語(cognates)を特定し、過去の語彙の形を再建する。また、複数の言語間である時期に共通して起こったことが特定できる言語変化の痕跡に基づき、言語の系統関係を科学的に割り出す。

比較方法は、インド・ヨーロッパ語族の比較分析にはじまり確立した手法であるが、これまでにさまざまな語族で応用されている。ただし、基盤にある考え方は共通しているものの、たとえば、文献資料に基づいて学説を立てるシナ・チベット語族における研究方法と、文献資料がほとんどないオーストロネシア語族における研究では、具体的なデータの扱い方や歴史的再建に対する見方がかなり異なっている。

いずれにしても、歴史言語学においては、音対応や語彙の比較再建については成果を収めているが、語彙をはなれた統語論や意味論については、比較再建のための確立した手法がなかった。たとえば前者に関して言えば、80年代ごろまでの文献で「文法の再建」が論じられている場合、それは文法語(=日本語の助詞や英語の三人称単数のsのように、それ自身だ

けでは独立してあらわれない、文法機能を担う語)の語彙的比較再建であることが多かった。これは、そもそも統語論の比較再建という認識がなかったことを推測させる。一方で、さまざまな言語にみられるパターンとその類似点や相違点を調べ、言語をグループ分けする言語類型論の分野では、とくに文法的特徴について、言語にみられるパターンの通時的な変化への関心もたれてきた。言語の類型が時間とともに移り変わってゆく、という考え方は昔からあり、



博物館での開催は、大学のキャンパスで行われる会議と施設や環境面で雰囲気異なり、好評を博した。

たとえば、膠着語が屈折語に変化し、やがて孤立語になる、というようなものは、よく知られている。こういった分析では音対応にこだわる比較方法からは完全に独立して、パターンの比較にのみ基づいて変化の方向について仮説を立てるやり方をする結果、実際にはありえない変化が仮定されることもよくみられる。類型論的な考え方は今後、言語の統語論的側面を比較再建してゆく上で明らかに必要ではあるが、歴史言語学的に受け入れられる方法論を築くためには、まだまだ課題が多い。近年では加えて、統語理論の立場からも、通時的変化に対する積極的なアプローチがみられるようになってきており、今回の学会でも多数の発表がみられた。

今回の学会では、音対応や語源の特定に関する発表に対して、統語論や類型論的特徴に関するものが目立ち、文法再建の方法に向けての分科会も行われて白熱した議論が展開された。残念ながら、本稿はその具体的な内容を描写するにふさわしい場ではないが、今後、さまざまなアプローチの方法がどのように融合し新しい方法を生み出して行くのか、大いに期待がもたれるところである。

新しいアプローチ② 比較方法とコンピューター処理

言語の系統研究の分野でコンピューターによる統計処理をあてはめる試みがみられるようになってから久しい。2年前の国際歴史言語学会では、招待講演のうち3分の1をコンピューター分析に関する発表が占めていたものの、大量のデータをどう統計処理できるか、統計処理の理論を言語にあてはめるとどうなるか、また、変数を変えることで、どのように異なるアウトプットを出せるか、など、まだまだそのほとんどが、「コンピューターでできることを言語データにあてはめてみる」作業に終始したものであるといった感が強かった。

今回の大会では、「コンピューター歴史言語学」というテーマでの分科会が開かれ、歴史言語学の分野にコンピューターをつかったさまざまな分析がどのような貢献をしえるのか、具体的な分析例を紹介する12の研究発表が行われた。その中には、言語の保守性の度合いや同源語の存在、音素表、類型論的特徴と言語変化の関係、また、言語音の「変わりやすさ」に基づいた自動再建の試み、語彙統計学の見直し、など、一昨年までに比べて、歴史言語学の手法をコンピューターでどう応用できるのか、さらにどこまでもっていけるのか、といったテーマが多く、確かに、「現代比較言語学において近年もっ

ともめざましい進歩をとげている分野のひとつ」(Kaplan and Salmons 2010: 194)と描写されるにふさわしい内容がみられるようになったと感じた。

大量のデータ処理を必要とする比較言語学の分野で、コンピューターのようなツールをつかわない手はない。これまでのように、統計処理の考え方を比較言語学に持ち込むことも、意味のないことではないが、やはり長年積み上げられてきた比較方法、そして前節で述べた文法の比較のための方法が確立すれば、その手法をどうコンピューター上で展開させ、より発展させられるのか、ここからの飛躍は予想以上に大きいものになるのではないかと考えているのは、私だけではないだろう。

手話の歴史研究と比較言語学

音声言語と手話言語は、いずれも同じ「言語」であるが、それを組み立てている要素が違う。音声言語では一連の音のつながりによって思考を表現するが、手話言語では視覚的な像を使う。音声言語の音素に当たるものは、手型・位置・動きであり、手話(音)素と呼ばれ、手話の音韻学の研究対象となる。歴史言語学では、「音素」の変化に規則性を見だし、言語の系統を追ってきたが、たとえば、手話素はどのように変化し、言語の系統分析にどのように貢献するのだろうか。

今回の学会では、日本語話者がよく使う「男」「女」を示すジェスチャーが、日本手話に取り入れられ、それが日本手話において、文法化をはじめとするどのようなプロセスを経て現在みられるさまざまな手話素へと発達したか、また、英語から指文字を通してアメリカ手話に借用が起こったこととその痕跡、などの具体例に関する発表がみられた。また、手話の共時的分析において、通時的な事実を加味しなければ誤った結果を導いてしまうことを示した発表もあったが、これはそのまま音声言語の分析にも当てはまる内容である。日本の研究者の中には、手話の歴史に関する研究報告をはじめ聞いた人も少なくなかったようで、これから先、私たちの言語変化に関する知識をどう深めてくれるのか、今後の発展が楽しみな分野である。

【参考文献】

Kaplan, Judy and Joseph Salmons. 2010. "Book Review: *Language Classification: History and Method*, by Lyle Campbell and William J. Poser." *Lingua* 120(1): 189-195.

きくさわりっこ

民族文化研究部准教授。専門はオーストロネシア諸語を対象とした比較(歴史)および記述研究、比較統語論、言語類型論、オセアニアの先史研究。著書に *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages* (Canberra: Pacific Linguistics, 2002)、論文に "The movement of people and plants in the Pacific: Reconstructing culture-history based on linguistic data" (2009 *International Symposium on Austronesian Studies*, 2010) など。